

ニホンジカの食害により変わりゆく植物相

三宅 隆

近年、ニホンジカの数の増加に伴い、各地で植物相の変化が、顕著に表れてきている（写真1, 2）。

南アルプスでは、高山帯のお花畑が食べられて、芝生状態になっているところが目立ってきている（写真3）。残っているのはハイマツとバイケイソウやトリカブトだけとなっている。

天城山の寒天林道周辺では、森林の下層植生のササが食べられて枯れており、森林内が遠くまで見通せる状態となっている（写真4）。さらに、葉に毒成分のあるアセビだけが残っている風景がよく見られる（写真5）。

富士山の国有林などでも、ササが食べられてなくなり、その地面には、バイケイソウが生い茂り、他の植物は殆ど見られなくなってしまった（写真6）。

梅ヶ島安倍峠周辺でも、地面の草がなくなり、立木の樹皮が食べられ枯れつつある（写真7）。さらに植物相の変化と減少に伴い、それに依存する昆虫や鳥類などにも大きな影響が出ている。

静岡県では、シカの捕獲圧を高めており、生息数は富士山や伊豆半島で減少してはきているものの、まだ自然を適正に維持する数には程遠いのが現状である。狩猟者の減少など問題点も多いが、生態系の保全のため適正数にする努力が望まれる。



写真1 東富士演習場内のニホンジカの群れ



写真2 富士朝霧高原のシカの群れ



写真3 南アルプス聖岳周辺のシカ食害状況



写真4 天城山八丁池前の樹林帯
ササが枯れて遠くまで見渡せる



写真5 アセビだけが食べられずに残る



写真6 富士山国有林内のバイケイソウだけ
茂った林内



写真7 梅ヶ島安倍峠シカによる樹皮剥ぎ